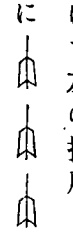
手法

負爲戯者多矣、古今風俗之變不惟投壺也、

〔投壺指南〕投壺するには、毛氈を敷、其中央に候板を施、其上に壺を置き、矢筩に籌一手づゝ入、氈の端と壺との正中に、青龍の籌は東、白虎の籌は西におく、東西に中局計局ありて、矢算を執るべし、戯者出座して氈より二尺手前にて一禮し、進て毛氈の際まで出、兩手にて矢筩を取、兩手にて矢を拔、左の手に握り、左の膝の上に竪に持、右の手にて左の握居る矢を一本取、壺の底の所へかやうに置き、又其次に置、三本置てまた一本横に  かやうに撞木狀に置き、座をかため、矢を一本づゝ取揚、兩方一禮して西より投出すべし、左の肩と右の肩と一整に齊ひ、身の動かぬやうにすべし、手を伸し尻を持上、肩を出すこと有べからず、矢壺の上五寸位にて、正直に立て入るにてなければ、眞の中にあらず、矢の立やうに心掛べし、十二箭投終り、記錄に載、算數にて賢劣を定て又投べし、勝の事は賢、負の事は不勝、持の事は釣、一番を一壺又一競、一相手は一耦、一壺は短競、三壺は長競、負逃は更代など云種々の名目あり、負たる人は罰杯一壺に一杯も有、また一算に一盃、十算に一盃も有、賢者は慶爵三番勝、二獻肴有べし、負たる人は綽興とて酒を飲ずば、謠にても肴とすべし、

〔禮記投壺〕投壺之禮、主人奉矢、司射奉中、使人執壺、主人請曰、某有枉矢哨壺、請以樂賓、賓曰、子有旨酒嘉肴、某既賜矣、又重以樂、敢辭、主人曰、枉矢哨壺不足辭也、敢固以請、賓曰、某既賜矣、又重以樂、敢固辭、主人曰、枉矢哨壺不足辭也、敢固以請、賓曰、某固辭不得命、敢不敬從、賓再拜受、主人般還曰、辟、主人阼階上拜送、賓般還曰、辟、已拜受矢、進卽兩楹間、退反位、攝賓就筵、司射進度壺間以二矢半、反位、設中東面執八筭、興、請賓曰、順投爲入、比投不釋、勝飲不勝者、正爵既行、請爲勝者立馬、一馬從、二馬、三馬既立、請慶多馬、請主人亦如之、命弦者曰、請奏貍首間若一、大師曰、諾、左右告矢具、請拾投有入者、則司射坐而釋一筭焉、賓黨於右、主黨於左、卒投、司射執筭曰、左右卒投、請數、二筭爲純、一純以